

---

# 名も無き少女

鏡

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

名も無き少女

### 【Nコード】

N9141V

### 【作者名】

鏡

### 【あらすじ】

少年と少女の潜入物語。少年の恋（！？）やちよつと笑いもあり。

## 第1話（前書き）

初作品となり、ぎこちない面もありますが楽しんでいただけ  
たら幸いです。

## 第1話

「あ、ごめんなさい」

そう言ったのは長い黒髪の女だった。

「いえ…」

僕がそう答えるより早く、女は走り去ってしまった。とても焦っているように見えた。それにしても女は足が早いみたいで、もう姿が見えなくなっていた。

僕の名前は『黒木 雄介』。とある名門公立高校に通う、成績優秀な三年生。あ、別に自慢してる訳じゃないよ。

僕の通う高校はこの辺じゃ一番レベルが高い所。制服だってそこら辺の平凡な高校のとは違って、王子様が着るような、ビシッとしたもの。歩いてるだけで皆の目は釘付け。

なんだけど。

さっきの女。あの子は最近、下校中によく見かけていた。綺麗な顔立ちをしているから、僕もつい目がいっちゃってただけ。いつも真っ黒なパーカーを着ていてフードを深くかぶってる。

パンツも黒だし、夏には地獄のような暑さが待っていることだろう。話がずれた。そうじゃなくて、僕が思うに道で偶然肩と肩がぶつかったらそれは『運命の出会い』なんじゃないのか？

何故「ごめんなさい」で終わりなんだ。もっとこう、

女『あつごめんなさい』

僕『大丈夫だよ。それより君、怪我してない？』

女『ええ…優しいんですね…』

僕『いえ、当然ですよ。それよりこれからお茶でもいかがですか』  
とか……いや、この展開は古すぎる。

なにせよ僕の淡い期待がこんなにあっさりと裏切られるとは。

まあいい。確かに美少女ではあったけど、一目惚れなんて一時的の迷いだ。だいたい僕は恋なんてしてる暇はない。僕は学校一頭がいいんだから。勉強一筋だ。

そんなことを考えながら家路を急ぐ僕に、翌日あんなことが起きるとは誰が予想できただろうか……。

## 第2話

翌日、僕は時間通りに学校に着いた。いつもの座席に座り、鞆から本を出しHRが始まるまで読みふける。いつも通りの日がまた始まるはずだった

ガシャーんっつっ！！！！！！！

「きゃあああ！！！」

女子数名の叫び声。窓ガラスが割れたのだ。割れた窓側を見ると、血を流した生徒が数名。破片が刺さっているようだ。

「早く誰か先生を！」

誰かが叫び、固まっていた教室の空気がとけ、皆一斉に教室を飛び出した。

僕はそのとき、窓際に不審な影をみた。

「…………だれ？」

窓際に近寄り、恐る恐る影に問い掛けた。姿は見えないが、人がいるのは確かだ。そのとき、僕はとてつもない力に引っ張られ、教室から窓の外へ飛び出した。

「うわあっ！」

そのままものすごい力と速さで引きずられ、校外に連れてこられた。そして止まった。

「ちよつと！なんですか！」

僕を力任せに連れてきた人にキレぎみに言った。地べたに尻餅をついてる僕にはその人の顔が見えなかつたけど、足元を見るに、女

性らしい。

無言のその人に軽い怒りを覚えた僕は立ち上がって文句をつけようとした。けど。

「！」

顔を見て驚いた。なんとこの女性は、昨日肩がぶつかった女だった。

「ふえ？なんで？」

我ながら情けない声を出した。

「あ、やっぱり君だ」 無表情にちよつと笑顔を浮かべる女。呆気にとられている僕をなめ回すように隅々まで見学し、それから汚れた制服をはらつてくれた。

「なんすか？僕に何か用でも…」

「うん。ちよつとついてきてほしいんだ。黒木くん」

胸にあるネームを見て、僕の名を呼んだ。ニイつと悪そうに顔を歪める女。怪しい。

僕としては『怪しい人にはついていつちやダメ』という教えを守る気マンマンの筈だったのに、手首を捕まれ強制的に連れ去られる。誘拐ですか？

「変なことはしないよ」

いや姉さん、すでに変な状況にもつれこもってますが。

されるがままに、僕は女にある場所へ連れていかれた。

### 第3話

「どこ此所」

連れてこられたのは大きな鉄の扉の前。町外れにある何かの工場だった。

「黒木くん、地理は苦手かな？」

またしても無表情に笑顔を浮かべる。何をたわけたことを。

「まあよくて、此所に来たのには理由があつて」

細長い人差し指で僕の視線を誘導する。指の先にはなんだか高級マンション等で見たことがあるような機械だった。

「あれを、解除してほしいの」

オートロックだった。さて、彼女は何をする気でしょうか。僕の予想が正しければ、

「ふほーしんにゅー？」

「言い方に気を付けてよ。ただの無許可家宅搜索」

一体何が違うんですかっ！そうだ。よく考えれば僕は彼女の名前も知らない。しかも全身黒装束。そして無駄に美人（割と重要）。いかにもあ・や・し・い。

「あたしの、名前？」

僕の顔を見つめ、少し困惑の色を浮かべた。だが無表情に代わりはない。すらっとした顎に左手を当て、右斜め上を眺め考えるポーズ。何故名乗るのに考える必要が？

「黒木くん、すきな言葉は」

まさかの質問返しとは。反論しようにも彼女の眼が「答えて」と言ってるようで、取り敢えず答えることにした。

「すきな言葉ってか……あゝ、僕は 純白 って言葉がすきかな」

彼女は何度かその言葉を呟いた。と、不意に僕を見て

「百合」

何が言いたいのか理解するのに数秒かかった。



「え……あ、名前？」

「そう」

それは本当の名ですか？多少の疑問がよぎるんですが。まあいいとして。

「名前なんて、ついたことないなあ」

百合さんがぼつりと呟いた。どこか寂しげだった。

「……どういうことですか？」

百合さんは無言のまま僕に白い手袋を渡した。本当に僕を巻き込んで無許可家宅捜索に及ぶのだろうか。

「早く。解除」

お言葉ですが、オートロック解除に頭脳は関係ありません。……などと言うヒマも与えず僕の手首を強引に引っ張り、解除できるはずのない機械の前に突きだされた。

こうなったら仕方ない。適当な番号を打って「この僕がやっても開かないんだから諦めましょう」とか言ってやめさせよう。その前に、僕には聞きたい事があった。

「百合さんはなんで此所に入りたいの？」

オートロックの適当なボタンを押す。4・6・8……

少しの沈黙の後、百合さんは静かに語った。

「あたしは、ある探し物をしていて、思い当たる所をくまなく探してるんだ。それで、此所に来てみたんだけどオートロックがはずせなくて」

そこで百合さんの言葉は止まった。不法侵入という罪を負ってまで見つけたいものとはなんだろう。なんて考えながらボタンを押す。2・2・5・3と。計七桁の数字を打ち込む。さあ帰ろう

「さすが黒木くんだね」

目の前の鉄の扉から「ガコン」と音がした。まさか……

「さあ着いてきて」

鉄の扉がゆっくり開いた。ああ……なんでこんなに勘が鋭いんだろ……う。

仕方ない、後戻りは出来ないと、僕は扉の奥へ進む百合さんの後を追った。

## 第4話

中に入ると、重機が沢山並んでいた。鉄の扉が閉まると真っ暗で何も見えなくなる。

「こっち、黒木くん」

ツンツンと僕の肩をつつき、再び先導者として歩き出す。とりあえず僕は後ろを着いていく。奥へ奥へと進むと、二階へと続いているであろう階段があった。コツリ、と百合さんのヒールが音高く響き、僕は内心ドキリとした。こんな音鳴らしたら誰かに聞こえるんじゃないかと思った。

「大丈夫だよ、誰もいないし」

どうして無人だと知っているんだろう。わざわざそれを狙って来たならまさしくストーカー行為…

「ストーカーなんてしてない。ちゃんと調査してるの」  
見ようによつては…まあいいや。

一段一段上がる度に腰近くまである黒髪がふわりと揺れて、甘い香りが鼻をくすぐる。そんな百合さんの後ろ姿を追う。何処へいくんだろう。あてがあるのかな。

「百合さん何処いくつもり？」

「ここね、二階が家になつてるんだ。だからそこを家宅搜索」

ほう。確かに調査はしっかりしてるんだ。

「で、何を探しに来てるのか教えてくれませんか？」

階段を登りきり、くるつと僕をみる。まだ二段下にいる僕に視線を合わせるように腰を低くし、顔を至近距離に持ってくる。

「秘密です」

相変わらずの無表情で左手の人差し指を口に当てて言った。不意打ちに不覚にもドキツと、鼓動が大きく鳴った。

百合さんは踵を返し、また進んだ。慌てて僕も着いていく。

少し奥へ進むと扉があった。その扉がきつと家へとつながる扉な  
んだろう。

「入るよ」

百合さんは僕の返答を待たず、扉をあける。かちやり、と軽い音  
をして、開く扉。本気で不法侵入しちゃうんだな…。

入ってすぐにあつたのは玄関だった。不法侵入者がご丁寧に玄関  
から入っているのか？

「泥棒じゃないから」

……関係ねえ。

百合さんは少しかがみ、靴を脱いだ。綺麗に並べて家にあがる。

「早く」

渋っている僕を急かす。渋々僕も靴を脱ぐ。

先程の工場とは違って、家のなかは明るかった。生活感溢れる家。  
こんなところになにを探しに来たのだろう。

百合さんは家の至るところの引き出しや扉を開けている。だが、  
なにも盗むものが無いらしく、開けては閉じ、を繰り返している。  
荒らしている様子もないから、これなら通報されたりもしないのか、  
と納得。一応白手袋もしてる。ばれなきやいいという思考らしい。

「ない」

一通り調べ終え、一息。無表情に変わりはないんだけど、少し悲  
しそうに見えた。気のせいかな。

「じゃあ…帰ります？」

色のない瞳でこちらを一瞥し、小さなため息をついた。

「そうだね。長居はよくない」

僕らは家を後にした。



## 第5話

時間にして約20分。鉄の扉を開けてから出てくるまで。早い。プロなのか？

「黒木くん、ありがとう。帰っていいよ」

抑揚の感じられない声。冷たい声に少し肩が強ばる。

「あの…」

「なに？」

なにか話し掛けようと思って発した言葉も、続きを探し出すことができず消えた。

「そういえば、学校から無理矢理連れてきちゃったね。今から帰ればまだ間に合うよ」

なにを言ってるんだ。こんなドキドキ初体験したあとに学校に戻って授業なんてできるはずがない。

「あの！」

でも、優等生のこの僕が、これ以上犯罪者になりうる行動なんて許されない。だから早く帰ろう。大人しく授業うけて、優等生气取るろう。

「これからまた違うところに探し物をしにいくなら…」

…あれ、僕は何をいいかけて……………

「お供します！」

……………なんて？

「…つぶ。」

百合さんが小さく笑った。僕は今なんていった？

「本当に？ちょうど黒木くんが欲しいと思ってたんだ。嬉しいな」  
くすくすと肩を揺らしながら僕をみる。

「は？いやいや！違くて！」

とっさの言い訳も虚しく無表情を笑顔に変えて笑う。ちょ、違うんだって！

「じゃあ次は…あたしの家でも」

い…家？少し…いやかなり興味がある。

「百合さんの家ですか」

「うん。あたしのお家」

こんな美少女のお家なんて、いったいどこの誰が拒否するんだ。

もしそんなやついたらそれは確実にボーイズでラブっているお方だ。

「で、くるの？」

来なよ、と訴えているような瞳。もちろん行かせていただきます

！と親指を立てて笑顔で答えたいところだが、学校に戻るという使命が僕にはある。

「いや…ちよつと」

「さっきお供しますっていったじゃない」

く……痛い所をつかれた。確かに言ってしまったが本心じゃない。本気で帰りたいのだ。

「い…うよ」

細くしなやかな指先が僕の手首に触れ、握りしめる。ひやりとした感触が、逆に体を熱くした。なんだこれ。

「ふ……ほら行くこつ」

なんか笑われた……。手首を強引に引っ張られた。それを振りほどくことも出来ずに、引き連れられる。

「私のことも、話したいから」

意味あり気な発言。百合さんの探し物や生い立ちを聞けるかもしれない。それを聞けば、犯罪者への道はもう免れない気がするけどそんなの知らない。僕の中の好奇心が生き物のように膨らんでいく。僕は、足を止めなかった。僕の腕を引く百合さんに大人しくついていった。

## 第6話

「ここが家？」

たどり着いた場所はとても小さな建物だった。

「うん。入りなよ」

手を引かれて僕は中に入った。扉を開けて靴を脱ごうとすると

「土足で構わない」

確かに靴を脱いで入るような雰囲気はないな。

コツコツと先を歩む百合さんを追う。どこに行くんだ。

「下、降りるよ」

目の前に現れた鉄の扉。百合さんがボタンを押すと、静かに扉が開いた。エレベーターだった。

「した？」

「うん。地下に降りるの」

なるほど、地下があるんだ。小さいと思っていたけど、下にでかいんだ。

エレベーターに乗り込む。百合さんが地下2階のボタンを押す。

ボタンを見ると地下3階まであるらしい。広いなあ。

「2階は私の住む部屋がある」

ん…？百合さんの日本語に違和感を覚えた。

「ここは、私だけの家じゃない」

…アパートのようなものかな。きっといろんな人が住んでるんだ。

「ここからは、靴脱いで入って」

地下2階、ある部屋の扉の内側での指示。要するに、ここは百合



さんの部屋。

「おじゃまします…」

綺麗な部屋だった。清潔感溢れる部屋で、白を基調とした家具が並べてある。使っている形跡は…あまりない。

「座つて。紅茶でいいかな」

「あ…はい。ありがとうございます」

ぎこちなく、お礼。なんか緊張する。よく考えたら小さい頃から優等生気取つてた僕は、異性の部屋なんて入ったこともなく、柄にもなく緊張しているわけだ。

……なんとなく、無言。とりあえず百合さんも座つてくれなきゃ話にならないから、黙ってる。部屋を見渡せば、テレビらしき物がない。ラジオもパソコンもない。新聞が散らかっている様子もない。どうやって世間を知っているのか疑問が浮かぶ。

「…はいどうぞ」

「どうも」

まずは一口。心を落ち着かせる。…うん、熱々で舌を火傷。まあ気にしないフリ。

百合さんがテーブルを挟んだ僕の前に腰をおろした。長い髪をひとつに束ねるのを黙って見学。

百合さんも落ち着いたところで、問う。

「で、なんですか？話したいことって…」

色のない瞳が僕を一瞥し、紅茶の入ったカップに移動する。カップを右手で持ち上げ、口元へ移動させた。その仕草はとても色っぽくみえた。

「まず…どこから言おうか」

一言、僕に聞こえるか聞こえないか位の声で呟いた。

「最初からです。ぐっちゃでもいいから」

とりあえず僕は百合さんについて、知りたいことがたくさんあるみたいだった。

「…わかった。最初…」

やがて百合さんはポツリと話しはじめた。

「まずはじめに…私は黒木くんのように普通な人間ではないの」

…僕のように普通な人間ではない…？

「私には名前がない。学校に行った経験もない。友達なんていない。普段人としやべらない。」

…この建物はある組織の建物なの」

そう言えば百合さんは名乗るとき少し困っていた。

そしてこの建物はある組織のもの。なんなのだろう。

「この組織の名は blood of murder 暗殺者たちが集う組織なんだ」

暗……殺…！？

一瞬、息が止まった。なんの冗談だ、とも思った。

「あ、安心してよ。私は誰も殺してない。むしろ…」

言葉を濁らせた。続きをまっても言葉が出てくる素振りはない。だから、こつちから。

「…そんな暗殺者なんて…信じられせんよ。そんな、なんかの小説の物語みたいな」

百合さんは黙ってしまった。右手に持ったままでいたカップをテーブルに置く。

「今は…信じてくれなくていい。ただ、今後信じざるを得なくなるから…今は聞いて」

百合さんの真剣な眼差しに、返す言葉もなかった。とりあえず黙って話を聞くことにした。

「私は物心ついた頃からこの組織にいた。父母がこの組織の一員だったから。でも母も父も本当は暗殺なんて柄じゃないし、したくもなかったみたい。組織に加入したのだから、なにか理由があったみたい。」

ある時…そうね、私が10歳になったころ、父が組織のボスに『抜けさせてくれ』って頼んだ。でもボスは許さなかった。そして父母に罰を与えた」

「罰……？」

百合さんは一拍置いて、重く口を開いた。

「監禁されてるわ。なにもない部屋に手足を鎖で繋がれ、目隠しまでされてる」

……なにも言えなかった。どんな状況が明確に言えると言うことは、直接見た、と言うことだろうか。

実の両親のそんな姿…考えただけでゾツとした。

「衝撃的だったわ。あんな何も出来ないようにされてるなんて。

私は必死に頼んだわ。『二人を解放してよ』って。そんな私にボスは言ったわ。『お前が二人分の働きをするならな』と。『人をこるすの？』私は聞いた。もしそうなら、私は怖くて仕方なかった。でもボスは首を横に振った。

『人殺しはしなくていい。ただ、探し物を見つけてくれ』それが条件だった。その探し物を見つけ出すまで両親はあのまま。

だから私は今、こんなことをしている」

ふう、と百合さんは溜め息をついた。テーブルに置いてある、冷めた紅茶を口に運んだ。ゴクリと喉を鳴らして飲み込む。その様子を、僕はただ眺めることしかできなかった。

## 第7話

いろいろ知りすぎた

百合さんはそういつて僕の手首にあるものをつけた。

「黒木くんには手伝ってほしいこと沢山ある。けど無理にとは言わない。こんな話を聞いて引いたかもしれないし。」

私を助けてくれるなら、明日もう一度ここに来て」

家へ続く帰り道で、そんな言葉を思い出した。

引いてはいないんだけど。正直驚いた。百合さん自身は殺しはしてないけどそんな組織に関わっている時点で犯罪だよなあ。

僕も手伝ったら犯罪者扱いか……。

………ところで、この手首の物はなんだろう。家にかえたら調べてみよう。

「ただいま」

控えめに挨拶をしながら家に入る。本来ならまだ学校が終わっていない時間。

「あら、おかえりー。早いわね」

母の言葉を見無視。そのまま二階の自室に駆け込む。………なにも

言われないから安心。

「よし……」

左手首につけられたリングをまじまじと見つめてみた。接合部は一度つけると外せないようになっていた。まったくもってただのリングにしか見えない。…と、リングの内側をよくみると

「あな？」

縫い針で刺したような小さな穴があった。

「なんだこれ」

何気なしにリングを手ごと振ってみた。

「ちやぶ……」

「？水？」

なにか液体のような音……。リングに内蔵されているのだろう。耳に当ててもう一度振る。またちやぶちやぶと音が……。ん？と……時計のような音もする。

「！まさかつ……！」

明日僕が行かなければ、僕は死ぬんじゃない？

これは僕の推測だけど、このリングには毒が内蔵してあって、あの時間になったら小さな穴から注射針の様なものが僕の手首にささり、毒を注入。それを解除するには、もう一度百合さんの元へ行かなければならない。百合さんの元へ行けば強制的に手伝うことに……。

「まじかよ………？」

行かなければ、待っているのは死……。

「………まだしにたくはないな」

溜め息。

まあこんな装置なくても行くつもりだったかな。

明日は今日にも増して疲れそうな予感。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9141v/>

---

名も無き少女

2011年10月17日01時56分発行